

2016年8・15に参加して

T. K

「第43回 許すな！靖国国営化8・15東京集会」に行ってきた。この会は43年前、靖国神社国営化問題が起きた頃にできた集会で、私は毎年ではないが何度か参加してきた。

今年は「平和を作り出す人でありたい～戦争の被害者・加害者。ふたつの視点で今を見る～」と題し、お父様（安海端郎師、1971年福音自由教会から）がインドネシア宣教師だった安海和宣師<sup>あつみかずのほ</sup>をゲストに迎えた。私たちは海外からの宣教師に多大な恩恵を受けたが、それに比較すれば日本が送り出している宣教師はほんの一握り（特に改革派では）である。そのような状況で宣教師の子どもとして育った和宣先生のお話にとっても興味があった。

先生は1973年マラン市に生まれ、15歳で帰国し、神学教育を受けられた後アメリカに留学され、現在は高田馬場にある単立東京めぐみ教会の牧師で、「特定秘密保護法に反対する牧師の会」の共同代表でもある。

先生はお話を大きく三つに分けられた。第一点のご自身の体験。①インドネシアでのこと。先生は日本会議のHPにある「インドネシアにおけるオランダ350年と日本3年半の統治」という項目から14項目を掲げ、共通している問題点は脱理性、脱論述、脱学術であり、天皇制崇拜の強制。また現地のことについて如何に事実無根の説明であるかをご自分の体験を基に話された。

幼いころはオランウータンをペットに飼う平和な暮らしのようであったが、成長するにつれ友達から日本軍の話の聞かされたり、それ故に仲間外れにされることもあったとのこと。お父様は赴任された頃「私は銃ではなく、福音を携えてきた」とおっしゃって伝道なさったそうである。住んでいたカリマンタン（ボルネオ）では戦争中ポンティアナック事件があり、2千人から2万人が殺されたと言われているようだ。数字の開きも大きく、先生はそれが「あった」とか「なかった」とかいう無駄な議論に巻き込まれぬようあえて「虐殺」ではなく「事件」と言う言葉を使われた。その事件を忘れぬよう碑がマンドールのレリーフとしてジャングルの中に建立されている。横長の大きな碑で迫害の様子が描かれている。現地では毎夏、憎しみの為ではなくこれからの平和の為に記念会を開いているそうである。決してこのようなことが二度と起きないでほしいと思わず先生は声を詰まらせられた。

②アメリカでの留学中、同時多発テロが起きた。それをまるでライブのように見、ホストファミリーやクラスメート、教授たち（すべてクリスチャン）と手を取り合って祈ったが、「これは悪。悪を排除するのは間違っていない。正しい。神がアメリカを守ってください。」というナショナリズムが植えつけられていくのを見た。彼らの生活、現実と信仰が分かれ、二元論だった。

第二点。今私たちが置かれている状況は同時多発テロ後の米国と酷似している。それは、メディアの沈黙、危機感の煽情、愛国心の喚起、権力の乱用、レッテル貼り（先生は「カゲキナサヨク主義牧師」などと言われているそうである）、信仰の戦い（二元論にならぬよう）の6点を挙げられた。

第三点、平和を作り出す人として聖書の言葉に押し出されて、今私たちができること。

1、祈る（安倍首相の為にも）。2、神の平和を握り締め、小さい所から作っていく。主はイザヤ書で平和の君と言われている。多くの人と理解、共有、支えあいを大切にしたい。3、声を上げていく。私たちの平和憲法を守るだけでなく世界のグローバルスタンダードにする。

結論として、長く困難な道のりかもしれないが、平和を作り出す人としてこれからも歩んでいきたいと結ばれ、例としてインドネシアに画期的な民主化を進めた人ジョコ現大統領のことを話された。彼はこつこつと長い道のりを経て現在のインドネシアを築いたとのこと。

先生の教会では、先生の働きで去る人もいたが評価する人もいて、自分の立場の表明が伝道の妨げになるとは言えないと質問に答えられ、教会の人には別件逮捕もあり得ると伝えていたとのこと。先生や会員の方々の覚悟のほどが伝わってきた。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである」（口語訳）の御言葉に忠実に従い、わたしもまた平和の為これからも歩んでいきたいと思った。

## 5 2 円を有効に

C. K

去る8月15日に毎年、九段下の教育会館で開催される市民フォーラムに行ってきました。今年の主題は「言論の自由」と政治、で、「時代閉塞を越える道」と副題が付けられたフォーラムでした。

発題者は、国会議員、沖縄のジャーナリストと在京のジャーナリスト（NHKと大手メディア）の四名の現状報告がありました。

四人の発言に共通する事は数年前に比べ、発信が窮屈な社会に成って来たと言う事。メディアも個人も自主規制を当然の事に行っている事。

ネット右翼の発信に振り回され、ごく僅かの極端な意見が国民全体の意見の様な状態に成っている。

この現状を打ち破る方法はあるのかと四人の発題後、質問の時間において参加者からの質問に四人の発題者が異口同音に言った事は、支えて欲しい。体制側（政権）を批判、また問題を提起した時に抗議・非難の投書や電話をする人は多く組織だって居る。最大の勢力は何と言っても「日本会議」です。最大の組織力を誇り、最大の動員力をもって居ます。

「建国記念の日（紀元節）」制定、「元号法」制定、「国旗・国歌」の制定、教育基本法の精神を葬り去り「新教育基本法」に全力を尽くし、成功しています。現体制側（政権）はこれ（日本会議と神社本庁）と鼎立関係にある事。この関係を三位一体との発言もあり苦笑しました。

現体制側に抗議や変更を求めている非体制側に非難を浴びせ、旧天皇制に持って行くことに専念している。非体制側を肯定発展させようとする側は凄まじい現体制側からの非難と攻撃を浴び、良く頑張っているとの発信は少なく極まれであり、自分の行ったことやった事が正しいのか間違っているのか不安になるとの発言が印象に残りました。発題者の願いは、同意見にたいして賛同のハガキで応援して欲しいと言うことです。

## Summer days に参加して

K. K

8月9日から12目の3泊4日、雀のお宿で全国の中高校生対象のサマーデイズが行われました。私は高校3年生、最初で最後の参加となりました。私はこのサマーデイズで、神様の御言葉を聞くと同時に、同世代のつながりを持ちたいと思い、参加しました。

私は、ミッション系の学校に通っていますが、食前の祈りをしている人は無に等しく、祈っているとある者は馬鹿にしたように笑います。しかしサマーデイズはちがいました。

同世代の子が当たり前のように賛美歌を歌い、聖書を読んでいました。毎晩行う聖書の分かち合いや3日目の証し会では、皆の神様に対する思いであったり、意見であったり、教会に行こうと思っても行けなかったりと、皆の抱えている悩みなど自分にはない部分の話の聞くことができました。これを通して、これまでの自分とこれからの自分について考えさせられました。

また4日間を通して大場重徳先生が話してしてくれたメッセージはどれも高校生である私たちの心に響く言葉ばかりでした。いろんな誘惑があるこの年頃に大場先生も神様から離れた時があつてたくさん過ちを犯したとおっしゃっていました。先生は「しかし神様は離れることなく自分の心の中にいて、悔い改めをすれば許してくがさる。と、たくさん過ちをしても、それでも許そうと聖書を通して言ってくれた。」とっていました。そして「もう一度神様のことを信じることができ、1人では決して生きていくことができない」ともしていました。イザヤ書46編の「あなたたちは生まれた時から負われ胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる目まで白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」とある通り、わたしたちは神様に担ってもらわなければ生きていくことができません。大場先生は力強く私たちの心の中を見ているかのように語りかけてくれました。

最終日には、「私たちの身近にいる神様のことなんか信じてない友達をこのサマーデイズに連れてこい。友達を変えられるのはここにいるみんなしかいない。」というメッセージをもらいました。私は、学校の友達を連れてこようなんて1ミリも思いませんでした。言っても相手にされないと思うばかりでした。でもサマーデイズに参加し3泊4日仲間とメッセージと共に過ごせば、いくら神様のことを信じてなくても、神様のことが分からなくても絶対神様に対する気持ちは変わったなと思ひ後悔しています。高3である私はキャンパーとしては参加できませんが、これからはできたらスタッフとして、今横浜中央教会に来ている中高生に参加してもらえるように働いていきたいです。

神様によって集められ、そして築きあげることができた同世代のつながりに感謝したいです。このつながりがなかったからこそ、たくさん話に刺激をうけ成長することができました。たった1回でもサマーデイズに参加できてよかったです。

## 「本の小部屋」から

T. K

教会 2 階の子ども部屋—「本の小部屋」でゆっくり本をめくる。それが私の夢の一つ。落合恵子さんは「絵本は生まれたばかりの小さな人から年齢制限なし」と言っています。以前から「本の小部屋」にある本を少しずつ不定期で紹介したいと思っていました。そして心豊かな楽しいひと時を分かち合えれば嬉しいと。でも探すのがちょっと大変かも。それでもちょっと覗いてみてください。ではさっそく…。

### 「グーテンベルクの不思議な機械」(ジェームズ・ランフォード著、千葉茂樹訳、あすなろ書房)

1450 年頃、ドイツでグーテンベルクが印刷機を考え出した。この本はその印刷方法、インク活字などをどうやって作るか、クイズのように興味深く描く。彼が作った聖書の写真も載っているが、本当にきれい(本物は銀座の教交配了階に展示されている)。

### 「兵士になったクマ～ヴォイテク～」

(ビビ・デュモン・タック文、フィリップ・ホブマン絵、長野徹訳、汐文社)

第二次世襲大戦中、ポーランド兵に拾われ、ポーランド軍輸送隊の正式な二等兵に登録されたクマ、ヴォイテクの実話に基づいたお話。ヴォイテクは兵士たちのアイドルになっただけでなく兵士と一緒に砲弾運びなどの仕事も手伝った。戦争の悲惨さ、ポーランドの悲劇もさりげなく伝わる。インターネットで検索するとかわいいヴォイテクの写真が出てくる。思わずクマを飼いたくなってしまおうぐらい。

### 「犬たちをおくる日～この命、灰になるために生まれてきたんじゃない～」

(今西乃子著、浜田一男写真、金の星社)

「この命、一頭でも救いたい！捨てられる命を一頭でも減らす社会へー。日本一の動物愛護センターを目指して、日々、奮闘する愛媛県動物愛護センター職員たちの日常を追いながら、命の尊さを考えるノンフィクション」(表紙の帯から)。愛くるしい動物たちの写真と厳然とした現実の前に、人間の傲慢に怒りを感じてしまう。命の重さが軽んじられている社会風潮、ペットを通して考えてほしいと思う。読んでいて哀しい思いもするが、また希望も湧いてくる。

### 「半分のふるさと～私が日本にいたときのこと～」(イサンクム著、帆足二郎画、福音館書店)

著者は 1930 年に広島で生まれた。15 歳まで広島など西日本で差別されながら暮らし、敗戦後すぐ帰国。その後彼女は母校の梨花女子大学の教授となり、日本で暮らした子どもの頃の体験、思い出を綴ったのが本書である。彼女たちが待ちに待った帰国、けれど、帰国すると同胞から日本の手先とみなされ、また差別を受ける。差別に屈せず人間らしく生きる彼女のお母さんの姿に感動するが、二重三重にも私たちは韓国の人たちを苦しめたことに私はショックを受けた。昔と変わらずヘイトスピーチが横行する昨今、差別とはどんなものか、どんなに傷つけるものか、ぜひ読んでほしい一冊だ。ちょっと分厚いのが難かもしれないが、読んでみるとこのぐらいの頁数になってしまうかと納得できる。